

『蓮』は宇宙の真理を

表現した因果な植物

『蓮(はず)』と言えば、神様や仏様の像や、絵画に付きものとなって植物です。神仏様がお座りになつておられる台座を、蓮台(れんだい)と言つて蓮をかたどっている場合が多く見受けられます。また、お葬式や寺院の御宝前に蓮の飾り物を供えたりしています。

私達がよく間違ふのは『睡蓮』と『蓮』の違いです。簡単に説明すると、『睡蓮』の葉っぱは、円形ですが、基本的に切り込みが入つており水に浸かっています。一方『蓮』の葉っぱも円形ですが、切り込みがなく綺麗な円形をしており水面より高く展開します。また花も負けじと高くなりまふ。大きな泥などでは二倍以上も茎が伸びまふ。汚れた泥沼であればあるほど、その泥を栄養源にして、益々大きく成長するのです。

ところで、この『蓮』という植物が霊的な場面でよく見受けられるのは、どういう理由からなのでしょうか？

花の中でも『蓮華』は、その花が開いている時(因Ⅱいん)に、すでに花の中に実を結んでいる(果Ⅱか)という大変珍しい植物なのです。私達の人生も因果応報(いんがおうほう)、蒔いた種は必ず自分で刈り取らなければならぬ。行つた行為は、寸分の狂いもなく、良い事も、悪い事も、全て自分に返つてくるという宇宙の摂理がありますが、この『蓮』の性質(因Ⅱ花・果Ⅱ実)が、宇宙の真理と摂理そのものであるとされ、神仏様に関する場面には欠かせない植物となつていふのです。

『法華経』のお題目は『南無妙法蓮華経』です。お題目として象徴される植物になつていふ。

日蓮聖人は『上野尼御前返事(うへのあまごぜごへんじ)』で、「妙法蓮華経と申すは蓮に譬えられて候」と述べられ、その理由を「花には、花が咲いた後で実が成るものや、実が成つた後で花が咲くものなど多くの種類がある。その中でも蓮華は、果実が成ると花が咲くのが同時という花。つまり法華経は手に取ればその手がたちまちに仏に成り、口に唱えればその口そのまま仏であるのです」と説かれていふ。

『法華経』の第一五番目『從地涌出品』には「不染世間法 如蓮華在水(世間に漂ふ悪い流れには決して染まらず、自分の信じた人間として正しい行いをしましょう。それは泥沼という汚れた水の中であろうと、決して染まらず、綺麗な花を咲かせる蓮のように)」とあります。

私達の人生というこの世界は、ある意味「悪」といふ泥沼の中に、「善」といふ一輪の綺麗な花を咲かせる事が出来る所でもあります。ここで言う「一輪の花」といふのは、私達の「命」の事です。あの『蓮』の様に、自分の目の前に立ちはだかる試練や困難が大きければ大きいほど、その試練や困難を乗り越えた時に、その経験を栄養源にして、人間の器、つまり人間力が養われるのと同じ事です。

また、あなた自身がクリア出来ない問題が目の前に立ちはだかることはありません。いま目の前の問題に悩んでおられるとしたら、どうか感情的にならず、理性で物事を見る様に心掛けて下さい。必ず、問題解決への糸口が見えてきます。感情ではなく、冷静に、クールな視点で物事を見て判断する様にして下さい。目の前の問題が解決し

た暁には、あなた自身の人間力が一段階アップし、人間としての心の器が大きく成長しているはずで、この世は因果応報。頭で考え、心で思い、体で行動した通りの結果が付いてきます。

さて、「便利が過ぎて不便になる」とはよく言つたものです。

戦後の価値観の大転換によつて物が溢れるようになりました。技術が進み、人の代わりに機会が何でもやってくれる「便利」な世の中になりました。いま携帯電話やテレビ電話が普及して、何時でも誰とでもすぐに話が出来ます。その事が皮肉にも人の「思い」を薄めている様に感じます。絆を弱くしているという側面があるのではないのでしょうか？要は「便利な物の使い方」なのだろうとは思いますが、「便利な物」には、心を込めたり、気遣いをしたりする、そんな心の思いや深さを薄めてしまふといった特徴があります。人の労力や時間がかからなくなつた分、人の「思い」や「絆」を弱めてしまつていふのです。あるハンバーガーショップは、携帯電話をかざすだけで商品を注文し、買うことが出来る

いうサービスがあります。ただでさえ人と話すことが苦手な人が増えている時代です。人と人が面と向かって話をし、五感を通して言わんとすることを理解する。そんなコミュニケーション能力がどんどん低くなり、日本人総コミュニケーション不全と言ってもいい時代です。0円のスマイルすら「いらぬ」と拒否して「スルー」する人を増やすだけかもしれない。「便利」はどんどんスマイルを拒否する方向へ、人と出会わない、関わらない方向へと、時代を押し進めている様に感じます。今はその気になれば何ヶ月も誰とも喋らなくても、生活に支障はないでしょう。それだけ人との関係が希薄な時代なのです。人間関係には煩わしい事や、

悩みや苦しみも付きものです。ある意味、人と関わらなければ喜楽で良いでしょう。けれど私達は人との絆を結び、人と人の中で揉まれてこそ、人間的に成長していく事が出来ます。先述した『蓮』の様に泥水に染まらず、なおかつ泥水を栄養源にして、綺麗な花を咲かせます。私達の人生も、試練や困難を受け入れ乗り越えた時に世界に一つだけの花、一人だ

けの個性として輝くことが出来るのです。人生においてドロドロの泥水は、人間関係の中にこそあります。その人間関係を断ち切った結果が至る所に見受けられます。

例えば『派遣』という雇用形態に象徴される様に、働く人はいつでもすぐクビに出来る歯車の一つになっています。なんの絆もない職場に対しては働く方もクールで、辞める時は退職願をFAXで送ってそれっきりというケースもあります。濃密な人間関係は時として息苦しいものですが、私達の人生にとって、心の成長にとって必要不可欠な事なのです。

便利が昂じて、人と人の関係が希薄になりました。人が犯罪という大きな悪に染まりやすいのは、社会から孤立した時だそうです。

目に見えるものだけで子供の価値をはかる親、子供に投資した分は回収したいと考える親、子供が寂しさのあまり心の中で涙を流しても気付かない親…。そういう親が増えて来ている。その愛が「物質的な充足こそが幸せ」という価値観によって変質してしまいました。太陽の光が届かない所にカビが繁殖するように、親などの「無

償の愛」が無いところでは、「利己的な犯罪」が活気づいてしまうのです。

今号の最後に便利の代表例を挙げて締め括ります。日本で電話機が一般家庭でも使われるようになったのは昭和三十(一九五五)年代です。壁掛け式電話の発電機を自分で回してカーボンマイクに向かって声を張り上げていた時代からダイヤル式黒電話に進化。そしてプッシュボタンへと少しずつ進歩してきましたが、それは経済の発展とリンクして進歩していった様に思います。それなりに進歩していた様に思いますが、あれから五十年余。電話機は個人がポケットに入れて携帯するものになりました。気が付けばすぐ横にいる友達や家族、時には乳飲み子までを無視して携帯電話の画面に熱中する社会になってしまいました。電車の座席に一列になつて座る乗客が全員、携帯電話をいじっている風景は異様です。目と目を合わせる会話の無い生活が良い社会をつくるはずがありません。

便利が過ぎて不便になる。便利な物が当たり前の社会には、人間の心は必要なくなります。心が通わなくなった代償として鬱病という心の病が蔓延し、利己的な犯罪が増え、夢や希望や志を

持つ大切さが失われてしまいました。今こそあの『蓮』の様に、環境に左右されない、独立自尊の精神を取り戻す時代なのではないでしょうか？幸も不幸も自分の心一つの置き所です。紙面が足りなくなりました。来月号では現代社会に蔓延する『ハラメント・鬱病・いじめ・幸せになる方法』について、述べたいと思います。

合掌 副住職 谷川寛敬

